

Chomsky[1995], *The Minimalist Program* (The MIT Press): Review I

— 鎮 魂 : 変 形 文 法 半 世 紀 と ミ ニ ・ プ ロ 13 回 忌 —

田 原 薫

1. 成功しないうちから 'Minimalist' を名乗る傲慢さ

'Minimalist' という言葉は1993年頃から言い出されたものであり、言い出した当初は 'a minimalist program for linguistic theory' 「言語学理論のための最小主義者の計画」の中に使われたように不定冠詞つきであり、同様な計画には他の様式のものもあり得ることを示唆したやや謙虚な表現であった。しかし、Chomsky [1995]が出した単行本（といっても論集だが）の題名では 'The Minimalist Program' と定冠詞つきになっており、彼の思想が定説として確立した、という自信に溢れている様子をそれは窺わせる。'minimalist' というのは《文法理論をできるだけ小さくしたい》、つまり記述をできるだけ効率的にして、小さな量の記述で多くの複雑な内容を処理できるようなものを目指す、という趣旨から命名したものであろう。しかしそのような最上級 'minimum' を含む名称は、真にそのような最小化、或いは最大の簡潔化に成功してから、周囲の人が評価して賞賛を込めて名付けるものであって、自分からそう称えるのは傲慢の誇りを免れないであろう。なぜなら、いくら提唱者本人が最高に簡潔だとか、記述が最小だと自己評価してみても、それより簡潔な、或いはより小さい文法理論が他の人によって提唱されるかもしれないからである。実際、他動詞の主語候補を動詞本体や目的語よりも早く節文構築現場（意識）に登場させ、従って句構造上最も深い位置に発生させる S O O T h という理論を、かくいう評者が1994年口頭発表（関西言語学会第19回）し、同学会の紀要 Kansai Linguistic Society No. 15 (1995)に論文発表している。またその理論の改良版 S O O T h 2 を1996年『ニダバ』第26号に発表した。それは明らかに Mini. Pro. より簡潔で効率的であるが、私は 'minimalist' などと自慢はしない。句構造の限界を認識しているからである。

2. 煩瑣で非効率、非力なミニ・プロの格（認可）理論

Chomsky[1995] の第3章によれば、他動詞の目的語候補と主語候補は、まず前者が動詞本体 V の補語 (complement) としてより早く、従ってより深い位置に発生して V' を作り、それが、指定辞として加わる後者と結合して VP を形成する【これを Subject-within-VP Theory という】。この構造から出発して VP の3要素がそれぞれ所定の位置に上昇して行

いうのである。「最小領域」というのは述語の目的語と指定辞を含むが、移動履歴鎖いわゆる chain の最小領域は途中の指定辞や目的語の痕跡を含む。従って図1の[V + Agr0]の最小領域は Subj, t_{subj}, Obj の集合である。Obj は上部の成分から見て Subj と equidistant なので、Subj に代わって Spec_{Agr0} に入ってもよかったのであるが、そこはすでに Subj が占拠しているのではできない。そこで Obj が移動するとすれば、もっと上位の Spec_T か Spec_{AgrS} へということになるが、仮にたとえば Spec_{AgrS} へ移動して?付きの Obj になったとすると、《格認可のために[V + Agr0]も AgrS に移動しなければならない。そこで複合範疇[V + Agr0 + AgrS]が形成されるが、その最小領域は?Obj, Subj と新たに図のVの補語の位置に残る t_{obj} であって、t_{subj}はそのメンバーに含まれない。だから Obj は[V + Agr0 + AgrS]の最小領域に入るために t_{subj}を跨ぐことは許されない》と彼は主張して、結局 Spec_{Agr0} に入るのは Obj だ、と論証?する【同著p.186】。しかし《 》内の主張は支離滅裂であって、彼の頭の悪さを如実に示している。以下でその論理展開の矛盾を検証していこう（☞【註】参照。なお Obj は常に最小領域内にある）。

まず（V単独ならともかく）[V + Agr0]が移動することはあり得ない。それは指定辞たる Subj に対格?を認可し、それを保障するためにずっとその位置に留まるべき複合述語であるから、Spec_{AgrS} へ転入した?Obj に何かの格を認可するのは別の複合要素、つまり[T + AgrS]ということになり、それが認可する格は何と！主格である。せつかく目的語候補にnominateして Objと書いたのに、またまた具合の悪いことになったが、何のことはない、Obj と Subj の表記を取り替えればいいだけの話である。つまり始発の句構造で、主語候補をVの補語、目的語候補をVの指定辞に位置づけておけばいいわけである。

また今となってはどうでもいい話だが、仮に[V + Agr0]が上部の地位に移動して t_{subj} が?Obj や Subj と共通の最小領域から外れてしまったとしても、なぜそれで Objの跳躍移動が阻止されるのか、飛躍した論理がわからない。問題なのはObjの最小領域内移動だし、Vや Subj やその痕跡の話はもう処理済みだから、t_{subj}が Subj と常にequidistant でなければどうこう、の話ではない。そして、Obj が一挙に Spec_{AgrS}=?Obj へ上昇すれば、当然その通路は Subj の移動通路の外側に形成されることになり、交差でなく入れ子型通路群(nesting, nested paths)を作って移動することになる。

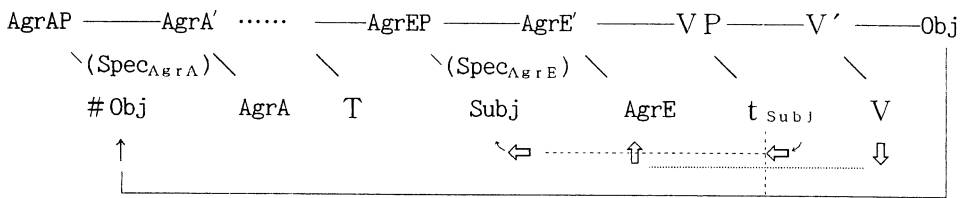
また、もし最初に Obj と t_{subj} (=原位置の Subj) とが上部要素に対して equidistant だと言うのなら、その不可思議な 'equidistance' の空間では両成分は平等であるから、V に対してどちらが補語とも指定辞とも言えず、VPは3分岐の枝で構成され、そこにVと主語候補と目的語候補が平等に配置されるはずである。いや、○○候補・□□候補と区別することさえおかしく、1個のVと2個のNP (nominal phrase)が平坦にVPを構成することになる。NPの始発位置に階層差がなければ、交差通路など起こり得ない。出発点の階層が同じAの項が遠くの Spec_{AgrS} まで、Bの項が近くの Spec_{Agr0} まで移動するだけの話ではないか。同じ著者の交差通路説は自分の 'equidistance' 説とも矛盾している。

3. VP内主語仮説は何に適合していたのか — 能格言語の格問題

今までの話から、チョムスキー派の 'Subject-within-VP Theory(/Hypothesis)' では格認可(格付与)のために主語候補も目的語候補も移動しなければならないが、最初のVPのデザイン【Subjが Objより上位でそれをc 統御する】を守れば crossed pathsを作らざるを得ず、逆に nested paths にこだわれば主語候補が目的語になり、目的語候補が主語になるという、ジレンマが発生することがわかった。

それでは、VP内主語仮説はまったく無用の長物かという、皮肉なことに英語や日本語のような(主格)対格言語と違う格システムをもつ、(絶対格)能格言語の格システムを説明するのに役立つのである。ただし図1のような記号と意味づけは変えなければならない。まず図1の AgrO は能格=ergative を照合(認可)する AgrE に替わらねばならない。そして AgrS は絶対格=absolutive を照合(認可)する AgrA に替わる。VPの項の記号はあえて変えず、agentivityが高い方の項をSubj、patientivityが高い方の項をObjと書き続けて対格言語との対比に便宜を図った。こうして書いた図2を見よう。

図2



能格言語についての予備知識は読者におありのことと思うが、自動詞の唯一項は能動性の高低に関係なく絶対格で標示される。他動詞構文では【有標的な 'antipassive' 構文でない限り】受動性の高い方の項が絶対格で標示され、能動性の高い方の項が「能格」で標示される。この格システムが図2にじっくり適合するのである。

図2で優先的に満たさねばならないのは $Spec_{AgrA}$ の地位である。だから AgrA は常に activeである(=活動する)が、AgrE は2項動詞の場合のみに活動し、1項動詞の場合たとえVの能動性が高くても AgrE は不活性(inert)になる。まず2項動詞(他動詞)の場合だが、まず活性化した AgrE にVが転入して[AgrE+V]を作り、この複合範疇がその指定辞に対して格認可する。だから Subj は原位置から $Spec_{AgrE}$ に転入して能格を認可される。ついで Objはその通路の外側を通り(つまり交差移動せず)、 $Spec_{AgrA}$ の地位に上昇して#Obj となり、AgrAの位置にできた複合範疇[AgrA+T]から絶対格を認可される。この過程でできるのは入れ子型通路群(nested paths)である。

次に1項動詞の場合であるが、受動性が高い項はVの補語、能動性が高い項はVの指定辞に生起する。受動性が高い場合は唯一項も2項動詞の場合と同じで#Obj 位置に移動し、同様なプロセスで絶対格を認可される。項の能動性が高い場合は図の t_{subj} の位置に発生するが、AgrE が不活性なので、やはり $Spec_{AgrA}$ の地位に移って絶対格を認可される。

4. 対格言語の変形流格理論を救済する方策 — 普遍必須項を優先配置せよ

能格言語であれ対格言語であれ、1項動詞（自動詞）はその唯一項として、能動性の高いもの【dance の場合など】も受動性の高いもの【die の場合など】も平等に格標示し、前者では絶対格で、後者では主格で標示する。それぞれの格標示システムにおいて、能動性の高い唯一項と受動性の高い唯一項とではVP内で生起する箇所が違ふと考えられ、前節の論議では、能格言語では受動性の高いものがVの補語、能動性の高いものが指定辞に生起する、と考えた。それを敷衍して2項動詞（他動詞）の場合も、受動者項がVの補語、能動者項が Spec_vに起こるとしておけば、入れ子型通路群を通る移動によって受動者項が絶対格に、能動者項が能格に格づけられることがわかった。

ここまで話が進めば、そんな能格言語の格理論を対格言語に利用するにはどうすればよいか、明敏な読者ならすぐおわかりであろう。一般論で言えば《普遍必須項（候補）の方を早く（Vの統率下に）導入せよ》となるが、普遍必須項といえば能格言語では絶対格項、対格言語では主格項である。だから、能格言語の格理論で絶対格項の候補をVの最初の項、つまり（絶対的θ役割が許せば）補語として導入するのは、先の一般原則に適っていた。この原則を今度は対格言語に適用すると、普遍必須項つまり主格項の候補を真っ先に、つまりVの補語として導入すべきだ、という帰結になる。普遍必須項をVの補語として導入したあと、次に（すなわちVの指定辞として）導入するのがVのsubcategorization(下位範疇化)、つまり2項動詞を1項動詞と区分することに関与する第2の項であり、能格言語で能格項であったように、対格言語では対格項の、つまり目的語の候補なのである。

もうおわかりであろう。格理論の背理=the paradox of Case theory とチョムスキーが呼んだ現象は、彼が最初に受動者項と能動者項を置き誤ったことに起因するのである。正しく直した置き方から出発する対格言語の格理論の図式は次のようになる。図3

図3

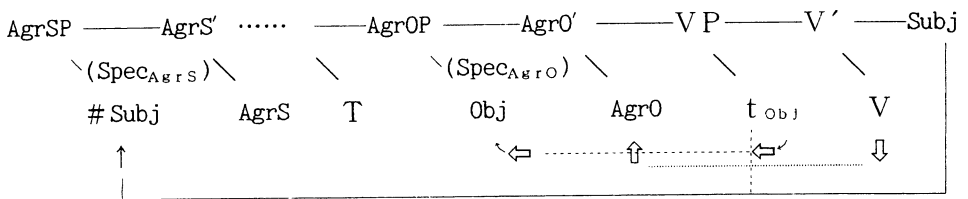


図3は型として図2とそっくりである。違う所といえば、Agrの種類と機能で、上位のAgrSが主格を照合（認可）し、下位のAgrOが対格を照合（認可）すること、そしてVPの項の構成が、補語のSubjが能動性の高い主語候補で、もと指定辞のObjが受動性の高い目的語候補になっていることである。「格理論の背理」はこれで回避できた。そこには忌むしい交差通路や、それを正当化する煩瑣な詭弁と実証性のないその論拠、結局は失敗に終わったチョムスキーのトリックめいた策謀(Chom' schematism)の影はない。彼の蹉跌は最初のVPに根差すが、遠因は分析文法と構築文法の混同にあるとってよいだろう。

5. ミニ・プロを超えるもの — A Soothsayer Program for Linguistic Theory

「著蒸す起案」というのは私が「チョムスキアン」と書こうとして打ったワープロの漢字変換で出てきた結果であるが、偶然にせよ面白い。チョムスキーが何か大著を発表すれば、それを蒸し返し・蒸れるほど研究し、その枠内だけの奇案を起案するのが彼らの仕事であり、業績でもあるわけだが、それは言語に直面对決する言語学の名に値せず、チョムスキー図式学(Chom' schematics)であり、彼らはChom' schematician にすぎない。大部分は田原説などに無関心であり、ごく稀に、図3とその説明などを見て、田原がチョムスキアンでないのを惜しんでくれる人もいるが、とんでもない、田原はミニ・プロより遙かに涼しく蒸れない句構造理論を提唱しているのだ。SOOTH (1および同2)である。

図4

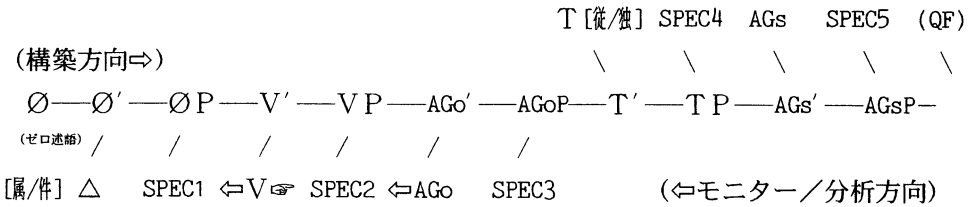


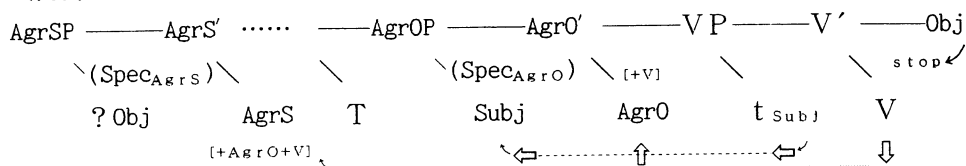
図4はSOOTH 2の図式である。今までのチョムスキー型図式と同様に右から左へと構築が進むように書く流儀もあるが、「構築文法だ！」という主張がよくわかるように、今回は左から右へ構築を進めるようにした。最も顕著な特徴は抽象的な叙述力の象徴ゼロ述語のから出発することであり、そこに[属性記述／事件記述]という選択的素性が乗り込む。△は条件や環境設定句、既成情報であり、ない場合もある。∅Pの指定辞SPEC1は無標的な主語候補であり、Vが他動詞なら変形流のSubjに当たる。そしてSPEC2がObjである。左枝の要素はより右枝の要素を「古参統御」v(eteran)-commandする、という。またVから見てSPEC1を「引率する／⇐」と言い、SPEC2を「配率(はいそつ)する／⇨」という。格付与(格認可)は両関係の交わりで行ない、その交わりを「挟み統率」という。するとSPEC2はVとAGoに挟み統率されていることになるが、これによってSPEC2は居ながら(in situ)にして対格を認可される。ミニ・プロのように複合範疇を作ったり、Objをその指定辞に繰り上げたりする手間は一切必要ない。

ここで、変形流のAgrO, AgrSに似たAGo, AGsが出てくるが、前者が単なるφ-featuresすなわちgender, number, personという素性の束、と定義されているのに対し、本理論ではAGo, AGsは内容未詳定ながら形容詞的存在であり、それぞれAdjectival Guarantee for Object/Subjectという英語名の略称という建て前になっている。もし動詞のない形容詞主辞構文ならばAGoの代わりに述語形容詞がこの位置を占めると解される。今までに移動は一度もなかったから、当然nested pathsもcrossed pathsも生じない。従って、唯一の移動であるSPEC1の昇進(→SPEC4→SPEC5)の話次回にお約束する。参考文献も次回に。

【註】：項の移動を制約するチョムスキーの論法についてもう少し詳しく検討する。

まず説明の便宜上、図1を再掲（ただし、やや詳しく）する。

図1（再掲）〔異分子 t_{Subj} が Obj の移動をblockする、と主張〕



チョムスキーの、'minimal domain' / 'equidistance' に頼る移動の制限の論法が真に説得力をもつためには、単に背理法で図1からの仮定の帰結がまずいことを述べるだけでなく、彼の主張に沿った図式の帰結がうまく行ったことを示さねばならない。もしかすると、図1からの推論を挫折させた難点が、彼の成功／正解と見なす推論の過程にも内蔵されているかもしれないからである。そこで図9を再掲してみよう。

図9

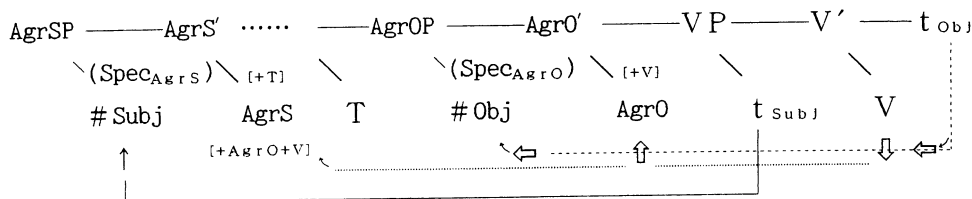


図9は彼の主張が一応成功した局面を図式化したものである。通常 t_{Subj} , t_{Obj} は移動後の痕跡を表わすが、移動前のまだ格認可を受けない主語候補／目的語候補をも表わすとする。対して#を付けて書いたのは、主格／対格を認可された移動後の主語／目的語である。これらは彼のもくろみどおり、交差通路を作ってそれぞれの終着位置に到達した。

しかし問題は、(他) 動詞Vが一旦AgrO位置へ上昇・合体して複合範疇【対格の認可に必要だから】を作り、その[AgrO+V]がさらにAgrS位置へ上昇・合体して複合範疇【主格の認可に必要だから】[AgrO+V+AgrS]を作る【実際は時制子Tも巻き込んでいるが、彼に倣って今は無視しておく】とされている点にある。このように、V単独でストレートにAgrSに上がらず、一旦[AgrO+V]になって、その全体がAgrSに上がって3成分の複合範疇を作るという点では、図1の失敗版とまったく同様なのである。

だから、図1で[AgrO+V+AgrS]の最小領域に t_{Subj} はなく、この t_{Subj} は SpecAgrS と equidistant でない、という彼の主張が正しいとすると、項の交差移動／入れ子移動に関係なく、それは図9にもそっくり当てはまる。そして今度は《痕跡が equidistant でなくなるような $t_{Subj} \rightarrow \#Subj$ の移動が適切か》という疑問が発生する。一旦 equidistant になった地位は永久に equidistant だ、と言えるように定義を改変すればよいが、それでは図1が背理法で排除できない。図1と図9の失敗／成功が逆転する可能性もある。